

PSA 検査の精度と高値例に対する精密検査の必要性について

前立腺がん検診の方法と PSA 検査の精度について

4. PSA 検査により 80 から 90%の前立腺がんが診断できますが、PSA が上昇しない前立腺がんもあります。
(PSA 検査 [cutoff 値 4.0ng/ml] では 95%が正常とされますが、その中にはラテント癌が 20~30%存在していません。診断できるのは 5%???)
5. おそらくは死亡に影響しないような小さながんが見つかることもあります。
(この基準と定義が明確ではありません。)

PSA 高値例に対する精密検査について

1. PSA 検査で異常値が出た場合には、泌尿器科専門医による診察をうけていただき、がんの疑いがある場合には、確定診断のために前立腺生検が必要になります。

1 直腸診, PSA, 経直腸超音波検査には

(PSA 検査の cutoff 値 4.0ng/ml について以下のように述べています。
《触知不能前立腺癌の診断に関しては、PSA が 10ng/ml 以上、おそらく実際には 4.0ng/ml 以上で生検を行うべきというのが共通認識であろう。(中略)現時点では、触知不能だが臨床的に意味のある前立腺癌を見つけるのに最適な PSA の値を推奨できるような長期成績はまだ得られていない。(中略) PSA はもっぱら前立腺腺上皮から分泌されるカリクレイン様セリンプロテアーゼである。臨床的には前立腺特異的ではあるが前立腺癌特異的ではないため、その値は前立腺肥大症や前立腺炎、その他の良性前立腺疾患でも上昇することがある。》
にも関わらず前立腺癌検診で PSA 検査の cutoff 値 4.0ng/ml が当然のように使われています。)

2 危険因子

前立腺癌には剖検によって発見されるラテント癌が存在し、加齢にしたがって頻度が高くなる。しかし、上述した臨床癌の罹患率と対照的に地域差が少ない⁶⁾。一般的にラテント癌の多くは臨床癌にならずに経過し、一部は緩徐な経過をたどって臨床癌に進展すると考えられている^{7),8),9)}。

参考文献

- 6) Yatani R, Chigusa I, Akazaki K, et al. Geographic pathology of latent prostatic carcinoma. Int J Cancer. 1982;29:611-6.
- 7) Etzioni R, Cha R, Feuer EJ, et al. Asymptomatic incidence and duration of prostate cancer. Am J Epidemiol. 1998;148:775-85.
- 8) 白石泰三, 他:前立腺ラテント癌. 前立腺癌診療マニュアル, 前立腺研究財団, 金原出版;1995. p.13-24.
- 9) 渡辺 洪:前立腺癌の自然史. 前立腺癌診療マニュアル, 前立腺研究財団, 金原出版, 1995. p.1-12.

(この記載であればラテント癌の多くは診断する必要性が低いということになります。しかし、PSA 検査 [cutoff 値 4.0ng/ml] でラテント癌がどの程度含まれているかの検証はありません。)

CQ3 ラテント癌の性質と頻度はどのくらいか?

ラテント癌は加齢に伴い増加し、50 歳以上には約 20-30%に認められる。臨床癌と異なり地域差が少ない。

ラテント癌 (何らかの原因で死亡した者への剖検により、はじめて発見される癌) の頻度は加齢にしたがって高くなる。50 歳以上では 13.0-26.5%に認めるとの報告がある^{1),2),3),4)}。欧米と日本での剖検例における前立腺ラテント癌の頻度差は、罹患率の相違に比較して小さいことが知られている。(後略)

参考文献

- 1) Yatani R, Chigusa I, Akazaki K, et al. Geographic pathology of latent prostatic carcinoma. Int J Cancer. 1982;29:611-6.
- 2) KARUBE K: Study of latent carcinoma of the prostate in the Japanese based on necropsy material. Tohoku J Exp Med. 1961;74:265-85.
- 3) Akazaki K, Stemmerman GN: Comparative study of latent carcinoma of the prostate among Japanese in Japan and Hawaii. J Natl Cancer Inst. 1973;50:1137-44.
- 4) 和田哲郎: 最近の日本人の前立腺潜伏癌 (ラテント癌) の臨床病理学的検討. 日泌尿会誌. 1987;78:2065-70.

CQ4 ラテント癌が臨床癌に進展することはあるのか?

一部の癌が長い期間を経て臨床癌に進展するが、多くは臨床癌とならずに経過すると考えられている。

前立腺のラテント癌(定義は“剖検により発見される癌”であるが、何らかの原因で死亡し剖検を行った場合、若年齢層の前立腺からも認められることがわかっており、ここでは“現在の臨床的な診断手法では診断できないような小さい癌”をさす)が臨床癌に進展するまでの期間の解明はむずかしい。

若年者の剖検による検討で、微小なラテント癌は30歳代から認められると報告されている¹⁾。ラテント癌から臨床癌へ進展する期間は11~12年と推測している報告がある一方で²⁾、発癌から癌死に至るまでの期間は45年以上と推測している報告がある^{3),4)}。前立腺癌は比較的ゆっくり増殖するものが多いが、稀に数カ月のうちに急速に進行するものがあり、ラテント癌から臨床癌になるまでの期間は非常に幅が広い。

いずれにせよ、一般的にラテント癌の多くは臨床癌にならずに経過し、一部は緩徐な経過をたどって臨床癌に進展すると考えられている。

参考文献

- 1) Sakr WA, Haas GP, Cassin BF, et al. The frequency of carcinoma and intraepithelial neoplasia of the prostate in young male patients. J Urol. 1993;150:379-85.
 - 2) Etzioni R, Cha R, Feuer EJ, et al. Asymptomatic incidence and duration of prostate cancer. Am J Epidemiol. 1998;148:775-85.
 - 3) 白石泰三, 他: 前立腺ラテント癌. 前立腺癌診療マニュアル. 前立腺研究財団, 金原出版;1995. p13-24.
 - 4) 渡辺 泷: 前立腺癌の自然史. 前立腺癌診療マニュアル. 前立腺研究財団, 金原出版, 1995. p1-12.
- (ここでもラテント癌を発見する意味は低い旨の記載がされています。)

PSA 検査が前立腺癌のスクリーニングになっていないとすれば、生検を受けた人の中の [前立腺癌診療ガイドライン 2006 年版](#) にも発見する意味が低いと明記されたラテント癌を発見している可能性はないのでしょうか。